

遠藤周作

王の挽歌

おうのばんか

下卷



新潮社

遠藤周作

江苏工业学院图书馆
藏书章

下卷

新潮社

おう
ばんか
げかん
王の挽歌 下巻



著者 遠藤周作
えんどうしゅうさく

発行 一九九二年 五月二五日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 営業〇三(3266)五二二 編集〇三(3266)五四二

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

王の挽歌 下巻 目次

宗麟対島津義弘

7

遠い太鼓

27

離別の日

45

神の国

67

主よ、私は、疲れました

87

ヴァリニャーノ神父の野望

107

天正少年使節

127

最後の闘い

147

矢乃の死

167

臨終の頃

187

失ったもの

211

豊後の臆病者

231

父と子

251

題字・安藤翠琰

王の挽歌
下巻

宗麟そうりん対島津義弘

元龜二年（一五七一年）。

宗麟をあれほど苦しめた宿敵の毛利元就もとすけが吉田・郡山城で死去した。七十五歳である。

以後、数年間、宗麟にはもはや北からの脅威はなくなった。家督は嫡男の義統よしのりにゆずり、臼杵うすき城に隠退したものの、実権は宗麟の手にあった。

「これまでの余はしばしば毛利狐にあと押しをされた謀反を鎮めるため全力を注がねばならなかった。されどそれら弓引く者は加判衆、同紋衆と他紋衆の力により誅殺ちゅうころされた」

そのような意味の言葉を天正元年の正月、臼杵城に参賀にきた諸将、重臣にむかつて宗麟は語った。

「余を哀しめるものは去年こぞに吉弘鑑理あきなりを失ったことである。豊前ぶんぜん、肥前いづみの戦いくさにおいて鑑理の尽忠はたとえようがない」

この日は風が少し強かったが快晴で、城を囲む海は白い牙のような波をたてて荒れていた。

「向後、余は国を富ますことに専心したい。そちたちもそれぞれの知行地を豊かにするよう心が

けると共に、眼を大友六ヶ国のすべてに向けよ。いや、大友六ヶ国だけではなく、海に向けよ、海の彼方に向けよ」

宗麟はこのやや曖昧な言い方によっておのれの狭隘な土地収益に汲々としてゐる家臣団を戒めるつもりだった。

武辺者というより外交官や学者としての資質に恵まれたこのインテリの家形は彼なりに家臣たちの伝統的な欠点を前から痛感していた。

「わが領国の者々はおのが甲羅に似せて穴を掘る蟹のごとし」

とその頃、彼はしばしば周りの若侍たちにそう語っている。

若侍の一人がその意味を問うと、

「蟹はおのれの穴にもぐろうとする。眼は穴の周りのわずかしが見ぬ。おのが領地、おのが知行地は文字通り命をかけて守るが、眼は遠くに及ばぬ。余は家形ゆえに領国の内のみならず、領国の外も知っておかねばならなかった」

と言ひ、昔、起ったひとつのエピソードを語った。

「余が少年の折、府内の沖に南蛮人の商人五、六人を乗せた唐の船が入ったことがある。余の父は唐人にそののかされ、南蛮人を殺してその持参せる財宝を奪おうとなされたが、余は父上を戒め申しあげた」

若い侍たちには初めて耳にする話だった。事実、そのような出来事があったのか、それとも宗麟がこの話に托して今後の自分の考えかたを示したのか、彼等には遂にわからなかった。

同じ元旦に彼が同紋衆に語った言葉。

「余が今日まで心悩ましたものは家臣の謀反であつた。一万田鑑相いちまだあきすけをはじめ小原鑑元あきもと、秋月文種、筑紫広門など指おり数えれば十人をこす。しかしなかで二階崩れの変はわが父が逆臣に殺害されただけに生涯忘れえぬであろう。その遠因は父が大友の家督をつぎ、叔父の菊池義武がそれを恨みに思つたためである」

そして彼はしばらく間をおいて語つた。

「されば嫡男、義統が大友の統領たる今、弟の親家がこれを妬ねたんではならぬ。兄弟の争いほど家門にとって危うきことはない。余は親家を僧侶とするため、臼杵に寺を作るであろう」

それが元旦の酔語でなかつたことは宗麟が實際に禪の師と仰いでいる大徳寺、怡雲和尚いぐんを師として現在の臼杵市、諏訪神社すわの東あたりに寿林寺という壮大な寺を建てたことでもわかる。建設の際、もちろん形だけのことであらうが宗麟は畚もっこをかついで土塊を運んだという。

「新九郎はこの寺にて修行致すのじゃ。怡雲和尚の教えをよく聞き、我らを悦よろこばす僧になるのが父と母との望みと思え」

彼は連れてきた次男の親家に教えた。新九郎とは親家の呼び名だった。

フロイスの報告によると、この親家は激しく激昂しやすい性格でもあった。彼は父に似ず書物を学ぶよりは「武器をとり、撃剣、相撲すもその他それに類した修練に専心」(フロイス「日本史」)す

ることを好んだ。

父に仏門に入れと命ぜられると親家は憂鬱な表情で眼をそらせた。激しい母から性格を受けついで少年は、日の当らぬ寺のなかで坐禪を組まねばならぬ自分を想像して嫌惡の情が背に走るのを感じた。

親家は矢乃に相談に出かけたが、

「次男、三男が仏門に入るとは武辺の家では当然の話」

ときびしい母はびしやりと息子を突き放した。

「まして仏教徒の多き家中のためにも親家殿が喝食^{かつしき}になられるのは悦ばしきこと。さればそなた一人のことではなく大友家中の安泰のためと心得られませ」

と矢乃は暗い眼で自分をみつめる親家にそう説教をした。

少年はやりばのない氣持を乱暴を行うことで発散した。木刀を持って彼は臼杵の城下町にいる野良犬を叩き殺したり、同じ年齢の小姓に角力^{すもろ}を挑み、ひるむ相手に怪我を負わせている。

教育係の清田鎮忠^{ちんちゆう}は親家がなぜ荒れるのが漠然ながらもわかっていた。

「新九郎さまは仏門に入り、仏僧になられるのがお嫌なのでござりますな」

と彼は率直に問い、十三歳の少年の眼を見た。

「しかし、それを新九郎さまが申しあげてもお父上はお許しになりますまい」

「お母上も首をふられた」

「お父上さま、お母上さまが案じられておられるのは、新九郎さまがいつか義統さまと戦い、争

われることでござります」

と清田鎮忠は宗麟の不安を説明した。

「では兄上のために、余は僧になるのか」

「さようでございます」

清田鎮忠は長い間、教育係としてそばにいただけに親家を最^{ひいき}にしていた。更に日頃から長男の義統を弱気で決断力のない青年だと考えていたから親家の不満がよくわかった。

「よい考えでございます」

と鎮忠は提案した。

「この儀、誰にも洩^はれされぬなら申しあげます」

「言わぬ」

「お父上にこう話されませ、禅の教えよりは切^{キリシタン}支丹に心が動く」と

親家は眼を丸くして清田鎮忠の顔を眺めた。

「切支丹に心が動くと？　されど余は切支丹については何も知らぬぞ」

「知る、知らぬなど問題ではござりませぬ。新九郎さまは幼少の折お父上さまに連れられて府内の切支丹寺に参^{まゐ}られましたな」

「よう憶^{おぼ}えておる」

「あの折から新九郎さまは切支丹に心を傾けられたわけでございますな」

清田鎮忠の口にうす笑いが浮かんだ。

當時、教会は府内だけでなく臼杵にもあった。臼杵教会は大友宗麟の寄附した土地と金とで現在の臼杵市畳屋町から掛町のあたりに建てられた。フロイスは「その建物こそ臼杵に名をなさしめ、この地のあざやかな美観と装飾となり、大勢の見物人を集めた」と書いている。

「そうか……わかった」

と親家はうなずいた。

この瞬間から親家は大人の世界に足を踏み入れた。謀略や策謀、偽善、嘘にみちた大人の世界に……。

「切支丹になることは切支丹の坊主として勤めることか」

「いや、違います。切支丹の僧は生涯、不犯ふぼつにして長年、修行せねばなりません。俗人の門徒衆はただ水を額にかけられる儀式さえ受ければよき由にございます」

清田鎮忠は宗麟からも臼杵の教会の主任司祭に最近なつた南蛮僧カブラル神父からも洗礼の話を聞いていたから、それを親家に説明した。

「するとその儀式を受けたあと、今のごとき毎日を送ってかまわぬのだな」

話をきいて親家はほっとした。彼も大友家代々の次男に生れた者たちと同じく、自分がわずかな年齢の差で家形としての地位を与えられぬことを少年ながら不満に思っていた。清田鎮忠と同様、弱気で信念に欠けた兄への蔑きずみの氣持が心の隅にひそんでいた。

月に一度、彼は昔の宗麟と同じように同紋衆の談合の場所に連れていかれ、すすけた仏像のように並んだ無表情の重臣たちと対座させられた。

「日向にては伊東義祐の力はとみに衰え、薩摩の島津方に傾く国人が次々とふえております」

加判衆を代表して田原紹忍（親賢）が南の状況を説明した。彼はこの頃、かつての健康的な青年の面影を失い、老獪な智者に成長していた。長い間、臼杵鑑速、戸次鑑連、吉弘鑑理が三老として同紋衆を仕切った時代は終り、このところ矢乃の兄で大友家の寺社奉行だった田原親賢が側近の一人として擡頭しつつあった。吉弘鑑理が病死し、戸次鑑連は毛利側の万一の動きに備えて筑前側の防衛司令官となり転出したためである。

「既に禰寝家、伊地知家、肝属氏も島津側に調略された模様にござります」

毛利との戦がやっと鎮まると、今度は南の島津の動きが忙しくなっている。

しかし宗麟は樂觀的だった。彼にはあの毛利狐の軍勢をさえ敗走せしめたという自信がまだ残っていて、

「まだ案ずるには及ぶまい。日向の伊東義祐を助けるにはそれなりの大義名分もいろいろ。戦は刀をとって争うことのみではない。將軍家、朝廷との駆け引きもある」

とひとこと言った。

昔とちがつて彼の発言には同紋衆たちをうなずかせる重みがあった。

談合が終ったあと、控えていた親家が挨拶に書院にきた。宗麟は父親らしい笑顔で、

「親家。寿林寺に欠かさず通うているな。喝食たる身は本来ならば寿林寺にて他の僧と寢食を共にすべきだが、特に和尚に乞うて今は館に住むことを許されている。されど、明年は我儘を捨てねばならぬ」

親家は眼を伏せたまま黙っている。その眼のあたりに矢乃と同じような強情さが漂っていた。

「嫌か。嫌でもいずれば僧になる身。修行は早ければ早いほどがよい」

「私は」

と親家は上眼づかいに宗麟の表情を窺いながら言った。

「寿林寺に入りたくございませぬ」

「勝手は許さぬ、この儀は父のみならず一族同紋衆にて決めたことである」

「私は……」

と親家は唾を飲みこんで、

「切支丹の水を受けとうござります」

宗麟はもたれていた脇息きょうそくから体を起した。

「切支丹？」

「さようにござります」

「唐突に何を申す。新九郎は切支丹などのこと何ひとつ知らぬではないか」

「何ひとつ知りませぬ。しかし昔、府内にて切支丹寺を訪れたこと、幼いながら憶えております。幼いながらあの折に眼にしたこと、今でも心ひかれます、それゆえ、父上さえお許しくだされば寿林寺に参るよりは白杵の南蛮寺に通いたく存じます」

親家は自分の口からなめらかに嘘が出てくるのに内心、驚いた。偽ったり欺いたりするのは何とやさしいことだろう。